

私も成長途上人

高松赤十字看護専門学校

平田友子

思えば……

看護学校に勤務して8年が過ぎました。臨床で働いた年月よりも長くなってしまいました。実習指導者として勤務していたころから数えると10年近く学生とかかわっていることになります。ふり返ると私もずいぶん優しくなったと思う時があります。歳月が私を成長させてくれたのでしょうか。最初は目標が高かった？ と思います。学生指導もビシバシやっていました。今は……少し余裕を持って学生に対応できるようになりました。時には飴もプレゼントしたりします(ノンシュガータイプですが)。いい加減になったのかな。それとも学生に近づいて来たのかな。助産婦学生に求められていたレベルと看護学生に求めるレベルの違いが明確になりつつあるともいえます。

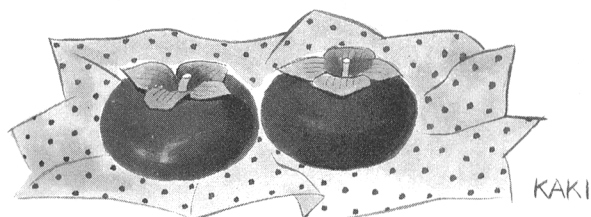
実習の場で

「思わず一緒に力んでしまった」「母親って偉大だ」「私もこんなに生まれて来たんだ」「とにかく感動した」「思わず涙がでた」「とにかくすごい……」など。これらは分娩見学後に学生が表現した感想です。生命誕生のドラマチックな場面に居合わせた時の素直な気持ちが短い言葉の中に込められています。こんな貴重な体験を学生全員にさせてあげたいと病棟の婦長さんをはじめスタッフの方たちも言うてくださるのだけど……。難しい状況になってきました。少子化とそれとともな

う他施設の経営戦略の影響、夜間実習をしなくなったこと、全寮制から通学制になり夜間の分娩呼び出しをしなくなったことなどから、分娩を見学できない学生が増えつつあります。助産婦職にある者にとってはさびしいかぎりです。

私が高松赤十字病院の産科病棟に勤務していた昭和56年から63年には年間1000件以上、月平均110件の分娩がありました。最近は年間650～700件、月平均60件になっています。実習学生数を調整して2週間の病棟実習(分娩室実習を含む)をしています。受け持ち妊産婦を決めるのに困るようになりました。経腔分娩の妊産婦の看護を実習させていたのですが、今年は帝王切開術を受けた方を受け持った学生もいます。しかし学生にとっては約1週間で退院する方よりも2週間かかわれる妊産婦のほうが看護を展開しやすかったようです。

退院する場に居合わせた学生は“しあわせそう”“いいなー”とつぶやきながら自然と顔が和らいています。時にはうらやましそうな表情をしています。「病院でこんな退院風景もあるんだと思った」と言った学生がいました。実習終了後のレポートの中に「今回の実習ではいままでとは違い、少し楽な気持ちで臨めた」と書いていた学生がいました。それまでの実習で学生がシビアな症例と向かい合ってきたことが想像され、けなげにもまた愛しくも感じました。実習目標を到達させることのみに終始せず、学生の気持ちや立場を察することのできる自分でありたいと思いました。



ジェネレーションギャップ!?

● 本校では3年次に修学旅行(赤十字本社挨拶と施設見学を含む)があります。訪問先に礼儀を尽くす意味で学生的身だしなみには気を配っています。そこで学生の希望も聞きスーツを着て行くことになりました。スーツに関して学生から次のような質問がありました。「先生、普通のスーツってどんな服を言うのですか」と。「形はリクルートスーツを参考に。清楚な感じのするものを……」と答えると「リクルートスーツって?」という学生もいるのです。今年の大卒女子の就職は「超氷河期」といわれ厳しい状況にあります。学生と問答しながら同じ世代でありながら就職先の心配をしない学生はなんて気楽なんだろうと思ってしまいました。当の本人はこのしあわせに気づいているのでしょうか?

● スーツの話が一段落した時に「今流行のリュックはやめてよね」と一瞬のひらめきを口にしました。するとすかさず「ええ〜! リュックはだめなんですか? みんなそのつもりですよ」と。「ああ言ってよかった」と思いました。しかし、「だって正装してリュックじゃ変でしょう?」という私が「古い」という反応を返されてしまいました。私も生物学的な年齢は自覚しているつもりですが……。やはり自分はまだ若いつもりでいます。しかし彼女らと私には確実にジェネレーションギャップがあると認識しました。

学生も変わって来ています。授業中や廊下での

立ち話中にポケベルが鳴ったことがあります。今や常識とか……。自分の考えた文章の添削をして欲しいとファクシミリが送られて来ます。柔軟な自分と新しいものにチャレンジする精神をキープしようと思います。実習中の学生の反応にも変化を感じます。スタッフに質問されている場面で堂々と「知りません」とか「習っていません」と答える光景が多くなりました。たしか数年前は「忘れました」と言っていたのにな。私は講義と実習指導の両方をしているのでこの光景を目のあたりにしては無念な気持ちに包まれます……。しかし変わらない学生の姿もあります。一生懸命看護している姿。生命の誕生する場面に息を飲み、新生児が生まれた瞬間にみせる表情など。ジェネレーションギャップのあることは確かなことですが、コミュニケーションを大切に、そのギャップを補う努力をしていきたいと思っています。

ありがとう

修学旅行の引率中に前回の貴家さんから「りれー随筆」のバトンを受け取ることになりました。お陰でこの数年をふり返るよい機会となりました。学生を通して自分の過去・現在・未来を考えることができました。また実習指導をする中で、自分が直接看護していた時とは異なるよろこびを味わえていることにも気づきました。学生とのかかわりもまだまだ試行錯誤、一喜一憂の日々。業務に追われる毎日を過ごしなが、いまが充実した日々を送らせてもらっていると実感しています。